



11月に入り、周りの木々が色づき始めました。先月まで暖かい日が続き、こんな陽気で大丈夫かしら？などと思っていましたら、今月に入り急に寒さが増し、慌ててストーブを用意する始末。季節が堰を切って冬に向かい始めた感じです。

### 生物多様性・・・里山 (SATOYAMA)

先ごろ、名古屋で生物多様性条約第10回締約国会議が開かれ、議長国として日本が粘り強くリーダシップを発揮。2020年を目途とした生物多様性を保全する「新戦略計画」等の各種採択や、その他各種国際的な取り決め等がなされました。そしてその会議の中のある作業部会で、日本の「里山=SATOYAMA」が話題となり、非常に評価されたとのことでした。詳細なことはわかりませんが、確かに、人と野性生物が、その「場」を介して、折り合いをつけながら共存するシステムは、生物多様性の保全といった観点からみても価値ある仕組みであるのでしょう。しかし残念ながら、実際の日本の里山はと言うと、荒廃の一途をたどっているというのが現実で、現状では決して誇れるものではありません。

さて、この秋、日本の至るところで、住宅地への熊の出現が相次いでいます。ニュース報道では、この夏の猛暑で餌となるどんぐりの実の生育が良くなく、食料不足に陥ったことが原因だとのこと。またその一方では、宅地化による、前述の里山の荒廃と減少が被害を大きくしているのではないとも言われています。里山とは人間の生活圏である畑や田と野生動物が生息する山との間に帯状に広がる落葉樹林帯と言ったらよいでしょうか。昔は、人もそこに分け入り落ち葉を集め、畑や田の肥料とし、あるいは燃料その他の生活資材を調達する場所でもありました。また野生の動物にとっては、重要な食料確保の場所であり、その機能は多岐にわたっていたはず。そして先ほど

の熊の出没との関係で言えば、なによりもこの里山の存在が人間の生活圏と野生動物の生息圏との干渉地帯として機能していたということです。確かに、たとえ熊といえども、敢えて怖い人間界に近づきたいとは思わないはず。豊かな里山で食欲を満たして、すんなり山へ帰ることが出来ないから、危険を冒して人間界へ入り込んできたというのが事実でしょう。襲われた方には叱られそうですが、テレビの映像で写し出される射殺された熊の姿は哀れです。山では、お父さん熊（あるいはお母さん熊）の帰りを家族皆が待っているかもしれません。

### 生物多様性・・・野生動物の襲来

じつは、里山の話から熊の出没と話題を展開したのは、表題のことに触れたかったからです。ここでは生物多様性の言葉の意味合いを変えています。言葉尻だけを捉え自虐的ユーモア風に使わせてもらいます。

実は昨年春のことです。話が非常にローカルになることをお許しいただき、続けます。因みに私の住まいは、荒川の支流である高麗川沿いにありますが、その自宅の裏の材木置き場に、突然日本カモシカが現れたのです。これには非常に驚きました。最初は太った大きな猪かと思いましたが、軽々と材木の上に飛び上がるのを見て、これはテレビでしか見たことのない日本カモシカだと直感しました。その姿、「もののけ姫」にでてくる「シシ神(ガミ)様」よろしく、数秒間じつと空を見ていましたが、あっという間に道路を飛び越え、川を渡って山に消えていきました。実は、これだけではないのです。今まで我々住人達が出会ったことのない野生の動物達がやって来るのです。通常の野生の鹿はもちろん、更にはサルも突如としてやって来て畑を荒らしていくのです。そして極めつけは、やはり熊です。いったい彼らはどこからやって来るのでしょうか。確かにこの地の山なみは遥か西へと続き、彼らが生息しているだろう奥秩父の山々へと繋がっています。しかしこのような出来事は以前にはなかったことです。笑ってしましますが、まさに生物多様性か、サファリパークか、です。彼らが暮らしている山々に、何か、大きな異変が生じつつあるのでしょうか。もしかすると、生物多様性の問題と対をなす気候変動の問題が、彼ら生息地の植生分布に異常を生じさせ始めているのかもしれない。そしてその結果が、このような野生動物たちの襲来となって現れた。とも考えられます。自虐的ユーモアでは済まされない問題が潜んでいるようにも思われます。

さて、考えすぎでしょうか？